

寝屋川キリスト教会

金持ちとラザロ(ルカ 16:14-31)

1. 富と信仰(16:14-18)

パリサイ人がイエスのことば(16:13)を聞いてあざ笑ったとあります。彼らは神と富との両方に仕えることができると考えていたからです。金持ちになることは神の祝福の結果であり、見方を変えれば貧しい人は神の祝福を受けておらず、それは罪の結果かもしれないということになるのです。だからイエスと弟子たちが貧しかったのを見て、イエスは神に祝福されていないと彼らは考えました。ところが貧しいイエスが富について語り、神と富とに仕えることはできないと言ったので、パリサイ人たちはイエスをあざ笑ったのです。

しかしイエスはパリサイ人を厳しく批判しています(16:15-18)。自分を正しい者としているが神はすべてを見通している。あなたがたは律法(神が定めた旧約聖書の戒め)に忠実に従っているようだが実は不忠実だ。大した理由もなく離婚することを簡単に許してしているが、それは姦淫を犯すのと同じであると言ったのです。つまりあなたがたこそ罪人だと語ったのです。そしてその後続けて語られたのが、金持ちとラザロのたとえ話でした。

2. 金持ちとラザロ(16:19-22)

金持ちは紫色の服を着ていたとあります。当時、紫の布は最も高貴な色で高級品でした。つまりそれだけ裕福であり、贅沢をしていたということです。その金持ちの家の門前にラザロという男がいました。彼は貧しく、寝たきりで、からだ全体がおできで覆われていました。彼は金持ちの食卓から出る残飯でお腹を満たそうとしていました。また犬がやってきては彼のおできをなめていました。ラザロは貧しさのどん底にいたのです。

パリサイ人から見れば、金持ちは神の祝福を得ていたので贅沢な暮らしができ、ラザロは罪人のゆえに貧しく、呪われた状態だということになります。ところがふたりとも死んでしまったのです。すると死後の世界では、生前の彼らと全く逆のことが起きたのです。

3. 金持ちとアブラハム(19:23-31)

ラザロは、アブラハムの側に連れて行かれました。アブラハムは旧約聖書に登場する、イスラエル民族の先祖です。ラザロは死後に素晴らしい祝福を得て、慰めを受けました。一方、金持ちの魂はよみ(死後のさばき)の中にいて、耐えられない苦しみを経験していました。苦しみの中で金持ちが見上げると、アブラハムの横にラザロがいました。それで金持ちは苦しみながらアブラハムに向かって「ラザロを自分のところに來させて舌の渇きを潤してほしい」と叫んで願いました(16:24)。

しかしアブラハムは金持ちの要求を受け入れませんでした。なぜならアブラハムやラザロがいる憩いの場と、金持ちが苦しんでいたよみとの間には大きな淵があって、お互いの様子を見ることはできても、行き来することはできないからでした(16:25-26)。

ここで金持ちは神のさばきが公平であることを悟ったのでしょう。自分が神の前に自己中心に歩み、多くの財産を得たことで神の祝福を受けたと勘違いし、それを自分の贅沢や楽しみだけに使っていたことに気づいたのです。多くの財産を得たことを神に感謝して、ラザロのような貧しい人のために分け与えていれば、結果は違っていたでしょう。しかし自分の誤りに気づいたときにはどうすることもできませんでした。

それで彼は自分の家族に同じ苦しみを経験させたくないと考え、ラザロを生き返らせて家族の元に遣わし、悔い改めさせてほしいとアブラハムに願ったのです。それに対してアブラハムは「彼らには、モーセと預言者がいます」と答えました。「モーセと預言者」とは旧約聖書全体を指す言葉です。聖書を学ぶならさばきの苦しみを受けることはないということです。

しかし金持ちは言いました。「いいえ、もし死んだ者の中から誰かが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるに違いありません」しかしアブラハムは「モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない」と答えました(16:31)。つまり聖書の教えに耳を傾けないのなら、もし誰かが死人の中からよみがえったのを見ても、信じて悔い改めることはないということです。

このたとえがパリサイ人たちへの批判になっていることが分かります。律法学者やパリサイ人は「自分たちこそ律法を正しく守り、神に従っている。だから多くの財産を得ているのだ」と考えていました。しかしパリサイ人は律法を守っている自分を正しい者とし、自分のためだけに財産を得て、貧しい人を憐れむことなく、助けようとしません。ほんとうは神に従ってなどいない。だからもし死者がよみがえるのを見たとしても、悔い改めることはないということです。

彼らの姿は15章の放蕩息子のたとえに出てきた兄息子の態度と重なります。金持ちと兄息子は多くの富を得ていることに満足して、貧しい境遇にいたラザロや弟息子を受け入れませんでした。その姿はお金に執着していたパリサイ人に重ねられています。そして律法学者やパリサイ人たちは、イエスが十字架で死んだ後、3日目によみがえった事実を前にしても、自分たちの立場を守ることばかり考え、悔い改めなかったのです。

あなたは与えられたお金をどのように使おうとしていますか。神から与えられたものと感謝して、自分のためだけに使うのではなく、神の栄光を表すために用いようとしているでしょうか。お金だけでなく、あなたの時間や賜物や立場は、すべて神から与えられたものです。それらを感謝して、神の栄光を表すために用いようとしているかが問われているのです。